

英語における Communicative Function の重要性

南出 康世

文法と機能

日本の英語教育に影響を与えた英語文法書は数多くあるが、A. J. Thomson & A. V. Martinet. (初版 1960 - 4 版 1986) : *A Practical English Grammar (for Foreign Students)* は、そのうちの 1 冊だろう。この本は日本語にも翻訳されたし、日本人の書いた英文法書のみならず、英和辞典にも大きな影響を与えた。伝統文法の枠組みの中で書かれた学習文法書であるが、4 版(1986)で初めて「(伝達)機能」((communicative) function)にかかわる記述が加わった。取り上げられた機能は command, invitation, request, advice, suggestion の 5 つにすぎなかったが、品詞論、統語論を主体とした学習文法に機能という概念が割って入ったのは画期的なことであった。1970 年代にはすでに生成文法でいう「文法能力」(grammatical competence)に代わる「伝達能力」(communicative competence)という概念が広く受けられつつあった。文法ルールを使って文法的に正しい文を生成する能力だけでなく、その文をいつどこで誰に対してどのように使うかを知っている能力、すなわち文脈に適切な文を生成する能力である。4 版の記述はそれを反映したものであろう。

当然のことながら英語教育面でも「伝達能力」が重視されるようになり D. A. Wilkins. (1976) : *Notional Syllabuses* や J. van Ek. (1975) : *Threshold English Level* などが提唱する Communicative Language Teaching (CLT) の考えが普及し英語のシラバスも大きく変化を遂げつつあった。発話行為理論 (speech act theory) を実践的な観点から解説した書も普及し始めていた。J. Blundell et al. (1982) : *Function in English* (発話行為 [本稿でいう機能に相当する] 及びその関連事項を 140 項目に分類)、W. R. Lee. (1983) : *A Study Dictionary of Social English* (発話行為及びその関連事項を 39 項目に分類) などがそうであ

る。1900 年代に入ると機能を主体としてそこに従来の品詞論・統語論を再編成する教育文法も登場してきた。G. L. Leech & J. Svartvik. (1994) : *A Communicative Grammar of English* (second edition), J. Sinclair. (1990) : *Collins Cobuild English Grammar* などである(後者は書名のどこにも communicative, functional という言葉はないが、純然たる機能文法書である)。

さて、1989 年告示の高等学校学習指導要領に英語 II C に代わってライティングが登場した。これを受けてわれわれ編集チームは *POLESTAR Writing Course* の編集執筆に取りかかった。上で述べた英語教育と英文法の流れを念頭に置いたのは言うまでもない。「はじめに」(英語の発想と日本語の発想)・Part I 「表現別」(表現のための文法)・Part II 「機能別」(文法をいかに機能にいかすか)・Part III 「パラグラフライティング」(文を超えた文法)の 3 部構成とした。この構成は斬新的で「コミュニケーションのためのライティング」「文法から談話文法への発展」という理念を具現化したものとして高く評価され、ライティング教科書のモデルになった。1999 年の高等学校学習指導要領の改訂にともなう第 2 版でも、「はじめに」・Part I 「発信型ライティングのための構文と表現」・Part II 「インタラクティブに書くための機能表現」・Part III 「パラグラフライティング」という 3 部構成にし、内容をますます充実させた。

コンピュータ・コーパスと慣用連語 (phraseology)

ここ 10 年間で英語研究の分野に大きな変化があった。コンピュータ・コーパスの登場である。コンピュータ・コーパスが大規模化し、書き言葉のみならず話し言葉の膨大なデータを精巧な検索ソフトで分析できるようになると、さまざまな新事実が明らかになり、それまで理論上の仮説にすぎなかつ

たものが統計的なデータで実証されるにいたった。その1つが「既成の記憶された語結合」(ready-made memorized combination)という概念である。上で述べたように生成文法の時代では「文法能力」が中心概念で、語は文法ルールによって生成された統語上の枠組みのスロットを満たすために語彙目録から選ばれる充填物(filler)にすぎなかった。「文」構造がまずあり、そのスロット(slot)に「語」を充填物(filler)として入れて新しい文を「創造する」(create)という発想であった。この意味で文法は統辞的(syntagmatic)であり、語彙は範列的(paradigmatic)であった。しかし大規模コーパス、特に話し言葉コーパスの分析が進むにつれ、ネイティブスピーカーは日常の場面においては、文法規則によって新しい文を「創造する」というよりも、何千あるいは何万という「既成の語結合」を繰り返し使っているか、あるいはその一部を変化させて使っているにすぎないということが判明してきた。語と語がどのように結合してどのような語彙的・語用論的意味をもつかが重大な関心事となってきた。これまで等閑視されてきた語の統辞的(syntagmatic)な側面に光が当てられ始めたのである。語の統辞的研究の重要性はすでに、Firthの指摘するところであり、その考え方はHalliday, Sinclairなどに受け継がれてきたが、コーパス言語学の発展はこれを理論の枠を超えて実証することを可能にしたのである。

言語にはそれぞれのコンテクストあるいはテキスト・タイプ(text type)にふさわしい言い回し(phrase)があって、それが大人のネイティブスピーカーの頭に、*dog, take*等の語彙項目と同じ形でストックされており、それを必要に応じて取り出すことによって円滑なコミュニケーションを可能にすると言われている。学者によって呼び方は、institutionalized expression, formulae, prefabricated[reassembled] chunk, discourse idiom[item], prefabricated[phraseological] unit, prefab, phrasal lexeme[expression], pragmatic [semantic] phraseme, multi-word unit, lexical phraseのように異なり、「意味が不透明・統語上の変形(受動化, 代名詞化, 語順の変更, 挿入, 分裂文の焦点化など)が不可」から「部分的に意味が透明・部分的に統語上の変形が可」まで、あるいは「自由な」「制限的」「比喩的」など、

いろいろ段階があるが、「慣用連語」(phraseology)という概念はこれらの用語を包括する言葉ということができよう。

もう1つ加えたい近年の発達は学習者コーパスである。これまで英語学習者の犯す誤りの指摘は主に教師の経験と勘に頼ってきた。それゆえ *Common Mistakes[Errors]* を題する参考書・テキストは多いが、構成は、語・文法本位である。しかし最近は事情が変わってきた。たとえば、D. Powell. (2005): *Common Mistakes at CAE* は Cambridge ESOL の6万枚の答案を基にした Cambridge Learner Corpus から学習者の誤答を引き出して、正解を与えたもので慣用連語重視である：

We want to improve our *chances/opportunities* of winning future contracts.
Everyone here has the *chance/possibility* to learn a second language.
There is a(n) *opportunity/possibility* that it will snow tonight.

われわれは単語として *chance, opportunity, possibility* の意味は知っている。しかしコミュニケーションのために使えるかとなると躊躇してしまう(ちなみに Powell が与えている正解は *chances, chance, possibility* である)。

2009年に高等学校学習指導要領が大改訂され、ライティングという科目名はなくなり「英語表現」に吸収されることになった。これを機に、われわれ編集チームは新たに *BIG DIPPER English Expression* シリーズの制作に取りかかった。指導要領においては、英語のグローバル化に伴い「コミュニケーション重視」の方針はますます強まったが、これに応じるべく、同シリーズでは文法事項の体系的学習に加えて、Communicative Function を基軸としたシラバスを導入した。さらに、「慣用連語」とそれを取り巻く語用論的な諸現象(ボライトネス, 文化的含意など)の最近の研究の成果を踏まえつつ、コミュニケーションに活用できる英語をより効率的に学習できるよう、執筆と編集に工夫を凝らした。ご愛用いただければ幸いである。

大阪女子大学名誉教授
(*BIG DIPPER English Expression I* 代表著者)